

第 20 分科会「里山と水循環」

テーマ：再生した川、再生へ取り組む川

日 時：2008 年 4 月 19 日（土）

場 所：Qiball(きぼーる) 13F3 号室

参加者：30 名

スタッフ：桑波田和子、荒尾繁志、加藤賢三（環境パートナーシップちば）

内 容

■講演：《再生した川》 坂川（松戸市）の再生 千葉県河川環境課 林 薫氏

かつては悪臭漂うどぶ川が、官民挙げての総力を結集し浄化への願いがやがて、アユまですめる都市河川として蘇った。そこには生きものが豊かになり人々が集う水辺となりました。

坂川は 28.9km の 1 級河川で、柏市の台地から流れ出し、松戸市を通り、江戸川へ入りやがては東京湾へ注ぐ川です。かつては工場廃水や家庭雑廃水などにより悪臭が漂うどぶ川だったそうです。平成 9 年、坂川再生懇談会がスタートし、国・県・市・市民(街づくりの会)4 者で取り組んできました。

浄化に向けての河川工事など始まり、北千葉導水路による利根川の水の流入と、古ヶ崎の浄化施設の設置により、川の水を松戸市内で循環する仕組みを作ったことにより、劇的に浄化されてきました。

また、生物を再生するために水際が工夫されています。水際を再生するために、自然河岸に注目し、生物が住みやすい水際（エコトーン）を検討し、設置しました。エコトーンとは、水域と陸域の水際のことです。50cm 幅の陸域を設けることで、マコモなどが生え、生物の種類が増えてきています。

最近ではアユやウナギ、モクズガニも見られ、トンボは 21 種類、魚は 38 種類など、自然が回復してきています。また、そこには、今では絶滅危惧種？のミズガキ（水辺で遊ぶ子どもたち）の姿もみられるようになりました。生物が増えてきたことで、水辺に人も戻ってきています。夏には、松戸宿坂川献灯祭りが開催され、賑やかな夏の行事となっています。

今後の課題として、

- ①川づくり。
- ②外来種生物。
- ③水とみどりのネットワーク。
- ④他河川での応用。があります。

今後に向けては、ツボを押さえて効率的、効果的に対応すること、工夫のツボは水際（エコトーン）にあるのではと思います。



■講演：《再生に取り組む川》 都川（千葉市）総合親水公園

生き物の目標を掲げた小川の再生 齊藤 久芳氏 千葉市花の美術館

千葉市は、都川治水対策の一環として千葉県が整備している都川多目的遊水。地を有効活用し、「千葉市緑と水辺の基本計画」において、緑と水辺のふれあい拠点に位置付けられた総合公園の整備を始めました。ここでは、ふるさとの原風景といきものに触れ合える田園公園をテーマとし、モニタリングを基に、

多様な動植物が生息・生育できる自然環境保全と再生を市民参画で進めています。この事業は、都川多目的遊水地の上部を利用して、緑と水辺の拠点となる総合公園を整備する事業として、平成18年から27年までおおむね10年間の整備事業です。

環境の特性として、都川沿いの低湿地や水田、休耕田、外側に斜面林が広がり、昔ながらの景観や自然が残り、自噴井の湧水が多く点在し、水環境にも恵まれ、様々の動植物が生息しています。

事業の進め方は、「千葉県緑と水辺の基本計画」の緑と水辺の拠点として位置づけられ、市民へのアンケートや生物調査を行い、整備検討会で、基本計画の確認、基本設置の作成、整備方針、運営方針を検討します。さらに、整備・利用・管理のありかたに、市民・企業・行政とのパートナーシップ推進の組織作りを目指しています。整備検討委員会は、学識経験者、関係市民団体、学校教育関係者、関係自治会、関係行政機関と合わせて19名で構成されています。計画の初めから協働（参画）する仕組みが作られています。また、2001年の生物調査では、底生生物36種、魚介類13種、両生類4種など、335種の動物が確認されています。その中には、ホトケドジョウ、ギバチ、ニホンアカガエル、カヤネズミなど貴重種も多く発見され、分布状況をマップに記入して、それを基に自然再生・観察ゾーンや、自然ふれあいゾーン、レクリエーションゾーンとゾーニングしました。

整備目標は、「故郷の原風景と生物にふれあえる田園公園」です。小川・田んぼエリアの自然環境からは、生物再生のために、小川的设计が作られています。

運営管理のあり方として、市民団体・専門家・関係機関・地域住民・企業等との協働による公園管理を進め、組織作りを目指しています。



意見交換



今回は、再生した川、再生に取り組む川の2例を通して、生物多様性が豊かになること、さらに、水辺に人が集まって来ることを知ることができました。参加者からは、川の浄化に向けて活動しているが、川の形態、周辺の工場からの廃水、家庭雑排水、堆肥が流れるなど多くの課題がなかなか解決していない現状の意見もありました。また、川の水温が上がっているのか？海の生物が変わっている？との意見も出されました。

まとめ

「海から丘を見たときに、川をきれいにしたい」との言葉にあるように、谷津田、市外地、海へと流れている川の浄化を進めていくと、やがて生物が多様になり、そこには人も集まってきます。水辺に親しむことにより、「水をきれいにしよう」という気持ちも育ちます。

しかし、河川には管理の問題、農業、工場など多くの課題があるところから、河川改修などでも、計画の段階から、市民・行政・企業等の関係者が参画することが必要です。

(提案) ・計画段階から市民の参画。

・水と緑のネットワーク作り。

・河川の水量不足から、水量の確保。

・山・田・畑・市街地・川・海へ健全な水循環システム作り。